

Computer Report

Vol. 58 No. 9 9月号 (通巻768号)

はじめの言葉

■夏の高校野球第100回甲子園大会は、二回目の春夏連覇を狙う大阪桐蔭高校と東北勢初優勝を狙う金足農業高校との決勝戦で幕を閉じた。結果は投打に優れた大阪桐蔭が圧勝、春夏連覇二回目の偉業を果たし、東北勢の初優勝はならなかった。日本中が注目し多くの国民が熱狂した決勝戦の記憶は長く残るだろう。その一番の理由は、大阪桐蔭校の選手が全国から集ったチームなのに対し、金足農高がすべて秋田県出身者だったことだろう。

■スポーツ界では今、絶対勝利を目標に相手チーム選手への暴行を支持した日大アメフト部の不祥事発覚後、アマチュアボクシング界トップによる不正ジャッジ指示疑惑、コーチ陣による選手へのパワハラ疑惑など、様々なスポーツ界で不祥事が次々と表面化していたことから、甲子園球児の熱戦は、より清々しく印象着けられた。鈴木大地スポーツ庁長官の苦虫を噛んだような顔つきでのコメントには、痛々しさが籠る。

■自分の立ち位置が少しでも優位だとすると下位の者に執拗な嫌がらせをして憚らない。潔さを是とするスポーツの精神に真向反対方向での愚行が、あまりの多さで存在することの証明でもある。表面化していないものが、想像を絶する規模/件数で潜在しているのだろうと思わせる。強者がいれば弱者がいる、これが世の常/常識だと言ってしまえばそれまでだが、万物の霊長を称する人間社会のあり方として無念の限り。

■そんな中、身体障害者の雇用機会を保証する最低限のルールを破る蛮行が、中央官庁/地方自治体においてまかり通っていたことが明るみに出た。しかも、かなりの長期間にわたっての慣例になっていたことも次々に明らかになっている。驚きを通り越すものがある。民間企業においても一定程度の従業員数を擁する企業に罰則付きで義務付けられている同制度が、罰則無しの特例の前にはないがしろにされてきていたわけだ。

■しかも念のいったことに、身障者でない者を身障者と偽装する形で身障者雇用の体裁作りをしてきていたケースもあるというから驚く。まさに確信犯である。行政機関が、文字通り、弱者苛めをする悪い方向での強者/権力者として存在してきた実態が浮かび上がっていると言える。視点を変えると、公共機関の労働現場には、その現職職員を含めて、今社会が求めている雇用環境を創造維持していくに足る人材が欠如しているようだ。

■こんな状況で「何が働き方改革」かである。安倍政権の目玉政策関連での基礎的データ提出で見られた改竄行為がすべてを物語っている。働き方改革は、文字どおり、中央官庁/地方自治体から整備し、国民に範たるところを示すべきである。一部の大企業経営者の要望を第一優先する形での「働き方改革」の正体見たりである。まさに強者のための労働システム改革である。その陰で、より弱者がないがしろにされようとしている。

■モリカケ問題にからみ、安倍政権の本丸内閣府から、財務省、文部科学省に至る我が国の最上級官僚たちによる不正行為の数々が明るみ出ているが、最高権力者の強権横暴を背景に警察庁特捜が捜査するも不起訴処分。国民は見ている。いつの日か、安倍政権政党は厳しく糾弾されることだろう。まさに、国会議員から高級官僚の働き方、それを鑑査監理する側の働き方改革こそ、国民に率先して断行されなくてはならない。(藤見)